雜　錄

マイスター・エックハルト

エーリヒ・ゼーベルク

クリバンスキーとテリーとの協力によるエックハルト羅甸文著作集（ライプチヒ、フェリクス・マイヤー刊行）は、昨年その第一册を出したが、本來エックハルト全集を計畫し、かつてクリバンスキーをもその一員とした、ハイデルベルク・アカデミーは、この最も獨逸的なる神祕思想家の著作出版は當然眞正の獨逸人によつて遂行されるべきものとし、獨逸學術振興會の援助の下に、豫れて一層完全なる全集の計畫を發表してゐたが、いよ／＼本年初、その第一册をストットガルトのコールハンマー書店より刊行するとのことである。この全集は、羅甸文著作（獨譯附）のみならず、獨文著作をも包含することによつて、現在許され得る限り最も完全なるエックハルト全集であらうとする。左に抄錄せるは、同全集刊行委員長なるベルリン大學教授ゼーベルクの「獨逸哲學會」に於ける講演である。

（一）羅甸文著作と獨文著作

偉大なる受容の時代、中世を通じて、ゲルマン諸民族は基督教をも含む古代の遺産を攝取した。この受容は外面的なるものから內面的なるものに進み、やがて世界史の中心に現れるべき、新しき諸民族の靈は覺醒するに至つた。この受容の過程の眞中に、所謂基督教の第二の希臘化の時代の終に、我がマイスター・エックハルトは立つてゐる。第一の希臘化とは、いふまでもなく、原始基督教の教義が希臘哲學の概念の補助によつて、基督教神學に組織された時期である。これに對して、第二の希臘化とは、トーマス・アクヰナスが、傳統の塵芥に埋れてゐたアリストテレスを救ひ出し、その眞の姿を示した時代である。それは西歐の思惟をその內奥まで動かした行爲であつたが、それと同時に、基督教の中に又それと並んで、新プラトン派の思想の流が侵入するに至つた。アリストテレス的觀念世界に住んだトーマスに於てさへ、新プラトン派的感情は全く消滅してはゐなかつた。彼と同じくドミニクス教團に屬し、彼の學統を承けるエックハルトに於ては、新プラトン派的色彩は一層濃厚である。この偉大な獨逸神祕思想家は、まさしくトーマスが克服せんとした或る形而上學に、卽ちラテン・アエロエス派（その尤なるものはシジエール・ドゥ・ブラマン）の思想に接近してゐたやうに見える。この精神史的諸聯關は何を意味するものであるか。勿論、獨逸神祕思想を目して、アラビヤ的或はユダヤ的とすることは許されない。しかしその本質に於ては確かに、新プラトン派的である。その多くの基礎概念は先づそこから解明されることが出來る。總てのエックハルト解釋は新プラトン派的基礎から出發し、常にそれを念頭に置かなければならない。しかし、精神史的諸聯關のみによつては、事象の本質は認識され得ない。同じ根からも、新しいものが生える。同じ親から生れた

子も時代によつて異つてゐる。そこに、個人の又歴史の總ての生の祕密がある。このことはエックハルトにもあてはまる。彼の獨逸語、獨文説教、語と人の背後に存する言表し難い究極的なるものは、ラテン・プラトン的思想界を或る他の領域に移し入れ、或る新しきものを創造する。現今屢々唱へられる、「エックハルトは羅甸文著作から理解すべし」といふテーゼは承服出來ない。寧ろエックハルト研究は圓環的になされるべきものと信じる。獨文著作から始めて、その基礎を羅甸文著作の解釋に得、その始源なる獨文説教に於て、終局に達するのである。

歴史敍述には、先づ刊行された資料があるのが普通であるが、エックハルトの場合には逆である。刊行は寧ろ最後にある。古くから、プッアイファによつて輯められた獨文説教集がある。何物にも鋭い批判を向けた前代は、これらの説教をも灰色に塗つた。眞正のものとして殘されたのは僅か二三に過ぎなかつた。しかし最近の批判的研究によつて、その他多くのものがその地位を恢復してゐる。獨文著作の眞正如何を決定するものに、新に發見された一三二六年の羅甸文辯明書と法王朝より異端の嫌疑を受けた諸條がある。それらの諸條が、獨文著作にも見出されることは、後者の眞正を證明するものである。しかし、エックハルトに歸せられた諸條や思想の文書批判的問題はかく簡單には解決されない。辯明書に於て彼自らがいふやうに、彼の説教の多くは僧侶、學者達により誤つて報告され、そのことがらは兎も角、その表現法には與し得ないのである。前世紀の終頃、かのドミニクス教團の偉大なる學者、デニフレが、一連の羅甸文著作の刊行によつて學界を驚かした。それらの著作は、我が獨逸神祕思想家が同時に又、哲學の究極の問題をアカデミクな形式で解き得たスコラ的神學者でもあることを證明した。エックハルトは、講義や説教やその他の機會に述べた思想を、聽講者の希望に從つて、一つの大部の羅甸文の著述に纒めたことは可成確實である。それは所謂三部作の書（オプス・トリパルティウム）であつて、命題書、問題書、説明書、説教書を附錄とする）から成る。その中現存せるは、説明書、卽ち聖書の各篇の解義であるといつてよい。さて、デニフレの發見は、一つの根本的な問題を招來した―エックハルトはスコラ學者であるか、神祕思想家であるか。その本質に於て神祕思想とスコラ學とが結びつくものであることは疑を容れない。多くのスコラ學者は同時に神祕家であつた。又兩者は、中世に於て、その生起の時代を殆んど同じくしてゐる。ゲルマン的精神が成熟して繼承せる遺産の複製に止らず、それをかりて自己を言表せんとしたとき、概念の言葉によつたものがスコラ學、心情の言葉によつたものが神祕思想である。傳統の獲得を遂行する能力が理性であるとき、それはスコラ學、意志であるとき、それは神祕思想である。加之、或る究極的なる哲學的諸概念と、究極の實在を生命あるものとし、それを言表せんとする神祕主義の關心事との間には或る内的結合が存する。ではエックハルトは何處までスコラ學者であつたか。彼の思索は偉大なるスコラ學者達の思想圏から出發する。しかも組織神學者達の概念が盡きるところそこが彼の活動の舞臺である。限

界を超え、捉へ得ないもの、表し得ないものを捉へ、表さんとする努力こそ彼の思索の特性である。次に、スコラ學者達も、聖書の各篇の註釋を書いた。しかし彼等の本來の事業は、スンマ或は命題集註釋の如き體系的業績であつた。反之、エックハルトについて我々が有するのは、少數の重要なる純粋に哲學的なる論爭を除いては、聖書の各篇の註釋のみである。だから、彼の主張は、聖書の釋義に敍べられてゐるわけである。これらの羅甸文註釋は多くの傳統的なるもの、スコラ的なるものを含み、その中には他人からとつたものが多い。それらは、講義の草稿に手を加へたもの。彼自らの考へを屢他人の概念、傳統的スコラ的術語によつて、不完全にしか表すことが出來なかつた。エックハルトに於て、如何なる羅甸語の概念が如何なる獨逸語に對應するものであるか、その認識は、彼の言語創造の力のみならず、思索力を明かにし、エックハルト研究の第一の困難を除くであらう。尙ほ、彼の羅甸文著作が聖書の註釋であるといふ事實は彼の神學者としての熱誠と、聖書に對する忠實を示すものである。このことは、後にルターも亦彼の思想を同じく聖書の釋義に於て展開したことを想起させる。これら總てのことを考慮するとき、彼の羅甸文著作は果して獨文著作に於て語り、彼の本來の思想はそこに明かであるのではなからうか、といふ疑問が起るであらう。例之、羅甸文說敎に於て、彼の權威者達によりつゝ彼の思想を陳べてゐるが、それを獨文說敎と比較するとき、それらは獨逸語に移されることによつて或る新しきもの、或る異常なるものとなるのを見る。借物の諸概念の中には、それらによつては充全に表現され得ない新しきものが存してゐるのである。

エックハルトは獨逸の神學者達には疎遠なるものとなつてゐる。個々の點についてはカトリクはプロテスタントに比較すればよく理解してゐる方である。しかし、彼等には法王の宣告が常に障害となつてゐる。プロテスタントは、古くはリッチュルから、近くはバルトに至るまで、神祕思想といふものに迷信的なる恐怖を懷いてゐる。神祕主義は宗敎ではない、宗敎の反對である等々と考へるのである。とはいへエックハルトに對する疎遠はも少し深いところにも由つてゐる。神學の研究には大體二つの種類がある。聖書の思想を自らの語で敍べるものと、その時々定まつた哲學的概念に還元するものとである。前者が今日も支配してゐる聖書學的、辯證法的神學であるのに對して、エックハルトはまさしく後の方法によるものである。しかし、彼は聖書といふ偉大な所與に依據しつゝ、それから、彼の思想を展開しようとした。それ故、彼の神學的思想界と哲學的思想界との聯關は寓意的道德的釋義によつて樹立されるといふことが出來るであらう。それでは彼の聖書の釋義とは如何なる內容のものであるか。「パテル・ノステル」を例にとらう。敎父諸家の見解を引用するのみで、その何れかに與することさへない。加之、それらの諸家についての知識は、トーマスの有名なる福音書註釋「カテーナ・アウレア」から得たものである。それ故「パテル・ノステル」の註釋に關する限り、彼はトーマス及びその他の二書に

よる編纂者のやうに見える。尤も、これは彼の少壯期のものである。だが、老年期のもの例之ヨハネ福音傳書の註釋に於ても「カテーナ・アウレア」によるところが大である。このことは、エックハルトの羅甸文著作の性質に對して重要な意味を有する。では、エックハルトは常にさうであつたか。彼には發展は認められないか。さうは信じられない。創世紀の第一、第二註釋には、アラビヤ的ユダヤ的に解釋された新プラトン主義がはたらきかけてゐる、アヰケンナ、アヰケブロン、マイモニデスが引用されてゐる。「エックハルトこそ彼自らの解釋者」といふテーゼは將來の研究に對して疑はしくなる。我々は彼の發展を追求しなければならない。この發展の原理によつて、彼の所說の不明なるもの、矛盾も解明されることがあらう。といつても總てが解かれるわけではない。初期の「パテル・ノステル」について云つたことは、その程度は減じてゐるが、後期の諸註釋書にもあてはまる。兎も角羅甸文著作の意義は新に評價されなければならない。それが編纂であるといつても、獨創的なる編纂もあり得る。他人の言葉で自分のものを表現し得るからである。ところが、エックハルトに於ては、概念とことばとが一致しないといふ特殊の困難がある。このことは、獨逸文著作との關係からのみならず、又その依據する諸權威との關係からいつても、羅甸文著作に妥當するのである。だが、一般的方法的考察はこれだけに止めて彼の思想に移らう。

(二) 哲學的基礎概念

エックハルトの思索の最初のそして最後の問題は存在である、彼は存在論者である。存在と如是存在を、絕對的存在と形相的存在を區別する。實體的形相は諸物に如是存在を、絕對的存在は眞にして善なる無時間的にして生成なき存在を與へる。總ての生あるものは、存在そのものである神によつて存在する。しかし敬虔なるものは總ての生あるものが存在であるといふより一層高き意味に於て、神の中に存在する。總ては神である、しかも現實に存在する何物も神ではない。總ての生あるものは神によつて生きる。しかしその具體的存在は神によらない。石は石の形相を有するが故に石である。しかし石の生、その絕對的存在は第一原因から直接に有する。火は火の形相からのみ火の性質を有する、しかし火の本來的に生ける存在は、絕對的存在神から由來する。この、具體的存在から、又存在そのものから嚴密に區別される絕對的存在は總ての生あるものゝ根底に存し、たゞ意欲或は運動としてのみ理解され得る。エックハルトの存在論は、質料と形相、實體と屬性からではなしに、存在と現實存在と高次存在から組織される。或るものは、生活力としての存在がその中に現存する限り存在する。存在には三つの段階が區別される——形相による如是存在、總ての生あるものに於ける神の生活力と考へられる存在、敬虔なるものが神の中に存在する高次の存在。生活力としての存在は哲學的意味のもの、高次の存在は神學的、形而上學的意味のものとして區別される。神と靈は一つの本質を有しながら、しかも同一ではない。神と靈とから流れ出る神の認識は神と共に生きることである。アウグスティヌスのいつたやうに、神は靈を靈自らの意識よりもよ

く知るのである。かゝる思想には哲學的見地から最も重視されるべきものがある。即ち、總ての動かされるものは又同時に動かす者をば動かす、兩者は力の場に於て一體となる。そこにはルターの「汝が信じる如くに汝は有する」の思想と相通じるものがある。エックハルトは、又存在のアナロギアと模像の概念によつても、汎神論に對して身を守つてゐる。總ての存在は神の存在に類するが同一ではない。敬虔なるものゝ存在に神は存在するといつても、それはたゞアナロギアに於てゞあつて、實在的にではない。この新プラトン派の思想から起つた存在のアナロギアの內容をなすものは模像の概念である。總ての存在は神の存在の模像である。基督も亦神の像である、人は神に向つての像である、卽ち神の像の模像である。こゝに注意すべきことは、如是存在、存在、高次の存在が、新プラトン派的なる「前進」（プロオドス）と「還歸」（エパナストロフェー）の思想に基くことである。現實存在するものが如是存在であるのは多數性と分裂への降下である。存在に於て轉向は用意される。が上昇は「子」が生れ、神が彼自らに還る高次の存在に於て起り、その力は神的なる靈の火花に存する。

次に、存在は認識であるか。かく問ふことによつて我々の問題は、複雜になるが却つて解明される。エックハルトによれば存在は認識である。このことは神が存在であるといふ根本思想に反しはしないか。しかし、神は「子」ではないか。總ての觀念をそれ自らの中に含む「子」は「父」と同一の本質を有するのではないか。かく考へるとき兩者の間には何等の矛盾も存しないことがわかる。エックハルトが神を認識として表はしたのは、神の存在を被造存在から特に如是存在から峻別せんがためである。神の存在は否定神學の意味に於て「全くの他者」である。知性であるといつても、思惟ではなくして、觀照と思惟とが一である。主と客が一なる最高の抽象である。かゝる思想方向は知なる「子」が絕對的存在なる「父」と一體であるといふ新プラトン派的三位一體論から由來するものである。そこには神の存在を人間思惟の領域から除かんとするアレオパギタ流の否定神學が決定的にはたらいてゐる。かゝる傾向は又、新プラトン派的流出論と迎合する、それによれば「太初言あり き」とは、「父」と本質を一にする「子」が、生が形成される諸觀念をそれ自らの中に有することを意味する。神が存在であるとは、總ての生あるものが生を有する限り神であることを、神が知であるとは、神が高次の存在であることを表す。それ故、神の世界創造は强制によるものではない。知性、卽ち「子」が總ての原理である。神は、神の像なる「子」に於て、天地を創造したのである。光の形而上學に從へば、人となれる言は光である、形體的諸形相の普遍的形象、形體的諸物の生の原理である。アレオパギタに從つて、言は總ての存在者の實體、總ての生あるものゝ生、總ての實體と生活體の原理と原因である。神が存在と認識であるのは、神が神であると共に子であるが故である。子は父と一の本質を有し原意志が、彼の中に自己と總てとを觀照せんがために、自らから生出したものである。エックハルトは三位に於ける分位を示しつゝ、しかもアウグスティヌス的なる三位一體論に從つてゐる。之加

アウグスティヌスをも超えて三ではなくして、一を強調する。「子」に於ける高次の存在の思想は神と認識との同一化に導く。エックハルトはヨハネ傳福音書註釋にてこの問題を絶對的と具體的との概念によつて解かうとしてゐる。絶對的には存在、生命、認識。具體的には認識、生命、存在の秩序を形成する。神か認識であるのは、神が「子」と本質を一にし、我々に對して觀念的に「子」に於て現れ、「子」が神からの第一の流出、ロゴスであるからである。神が存在であるのは、總ての運動に先立ちそれ自らに靜止せる、總ての運動の彼方にある存在であるからである。絶對的秩序に從へば神は先づそれ自らに於ける存在、ついでそれ自らに於ける意欲又は生命、最後に「子」に於て認識である。本源に於て、自らを生出さんとする父の暗き衝動ど意志によつて、生あるもの、諸原像がその中に生きる「子」が生れ出づるのである。さて、神が存在ではなくして認識であるとするなら、かゝる絶對的認識によつて人間は神の姿を有することゝなる。認識は創造されたものではなく靈の根柢は被造ではなくなる。こゝに至つて、グラープマン等によつて指摘されたラテン・アエロエス派、特にシジェルに對する關係が現れる。周知の如く、彼等は人間知性の統一と單一とを主張したのである。しかし、エックハルトを理解せんとするならば、彼の思索が常に新プラトン派的であること、彼が靈について語るとき、それは個々の靈ではなくして、原存在からの流出である靈そのものであることを念頭に置かなければならない。かゝる絶對的なる靈は「子」の模像として、アイオーンの現れとして考へられる限り、子と等しく被造ではない。反之、具體的なる靈は被造である。像に模して作られたもの、像の像である。神は靈の城にあるがまゝの姿で入る。が知性には眞なるもの、理性的なるものか意志には善なるものを奏つて近づく。神は、それ故、靈の城に現れる以外は隱れたる神である。エックハルトはロンバルドゥスの語を引いて、靈には被造のハビトゥスがあるのではなくして、被造でない聖靈が直接に靈を動かすのであるといつてゐる。ではアイオーンとしての靈そのものと、敬虔なるもの、體驗による具體的なる人間の靈とは如何にして結つくか。それも亦、靈の火花によつて、神或は基督が直接的に靈にはたらきかけることによるのである。エックハルトの思想には矛盾と飛躍が認められたが、絶對的なるものから具體的なるものへ移行は極めて重要である。全く新プラトン派的なる火花の說に從へば、被造の靈に於ける被造でない火花はアイオーンの最後の輝きと考へられるのである。絶對的なるものと具體的なるものとは、靈を三位一體の像と考へ、アナロギアに於ける一とすることによつても結びつくのである。靈が何等かの意味に於て神的であるときにのみ「子」が生出し、從つて上昇が實現する場所となり得、又その力を得る。しかし、エックハルトの說く、基督と靈の火花とのアナロギアの關係は明瞭を欠いてゐる。しかしかゝる難點も、彼の發展を諸階段を一層鋭く洞察し得るに至れば或は解決されるであらう。

エックハルトの世界像は新プラトン派的である。彼の關心は全體に向けられてゐる。全體は、惡を考へても、善である。惡も亦

全體のために不可缺である。宇宙の諸段階は互に正しい關係をなし、間隙なき一を形成する。存在を與へることがより高きものの本質であり、存在を受け、求めることがより低きものの本質である。より高きものの本性はより低きものの本性に現存する。これと關連して神の豐かさが考へられる。これは各獨自の本性を有する無數の天使に於て現れ、「子」に於て諸物の無限に豐富なる觀念を有する。それと共に、神の慈愛が說かれる。神は充ち溢れ、自己を分ち與へんと欲する。無限に豐富なる觀念を有する神は觀念的可能性に充されてゐるともいへよう。それは、神を純粹現實性として考へるアリストテレス＝トーマス說と鋭き對立をなすものである。尙ほ又、諸物は神に於て、諸物の諸觀念であるといふ思想もプラトン的である。

最後にエックハルトの數、場所、時間に關する所說を述べよう。場所も時間も數によつて規定されてゐる。兩者は本來的なる意味に於ては存在ではない。存在はたゞ全體にのみ相應はしきものである。さて全體は一である。從つて存在は一者である。しかるに數は多者と諸部分に屬する。一者のみが存在であり、諸部分は存在を受容する。パラドクスを冒していへば、數は一でないが故に無である。又時間も、數であるが故に無である。それ故神についていへば、神は或る場所にも時間にも存在しない。神は一者であるといはれるが、眞實は、一者といふ假面をつけてゐるのである。數は總て不完全性であり、存在からの墜落である。罪とは一者からの、從つて存在からの墜落であるが故に、多への分散である。神は何處にも現存し、永遠である。數の制約を超越してゐる。一者とは、多でないといふ意味に於ては否定的であるが、實は肯定的である。否定の否定、卽ち最も確實なる肯定である。しかし、一者といふも、尙ほ神の本質を規定するには足りない。では、如何にして一者から多者が生じるか。又それと關聯して創造、存在の分與は如何に考へるべきであるか。(一)かの有名なる新プラトン派の思想を盛る「原因論」が敎へるやうに、第一原因は、造るものを造つて尙ほ充ち溢れる。創造といふも一からの下降といふも比喩に過ぎない。しかし、この發出論的なる創造も、時として基督敎的意味に說明されてゐることもある。(二)神は、個體をではなしに、宇宙を創造する。宇宙は一者でありながら、多と諸部分を有する。それらを宇宙の全體性と完全性のために要するのである。一であるのは神から、多であるのは被造物の現實存在から由來する。多が一に還歸せんとするところに完全性がある。こゝに於ても亦、一者が自己を失ひ、自己に還歸し、かくして自覺に達する下降と上昇のシエーマーが支配してゐる。被造でないものは常に一である。被造物は多となり、一者に還歸する。神の探究は生の運動の原理である。それは、神を求めることと共に、神が求めることを意味する。(三)第一原因の第二諸原因に對する關係も全くトーマス的に說かれてゐる。第二諸原因はその力を全く第一原因に負つてゐる。神は諸物に生命を與へる存在であるならば、第二諸原因は苦惱と不安に充ちた諸物の生成を規定する。エックハルトはそれらの階層といふやうなものは考へない。それらは、より高

き力によつてはたらくが、究極は第一原因の力によつてはたらく。總ては第一原因によつて意志され、その存在は一である。從つて偶然といふものはない。神から墜ちるものは、無へ、もはや存在が存在しないところへ墜ちるのであるから。惡も亦非存在であるその原因はない。罪も亦無である。神は死の創始者でもなければ罪の創始者でもない。存在から非存在へ橋渡すものはない。死も亦總ての害惡と同じく缺作であつて能作ではない。(四)總ての被造物は神の精神の中に先在すること像が畫家の精神に於けるが如くである。この觀念的世界は無からの創造の作用によつて現實存在を得る。存在の相に於てのみ、被造物はその原因に似てゐる。存在は現實存在の原因であり、その目標である。神なしには如何なる存在もない。神が瞬時も手を引けば被造物は無に歸する。エックハルトの思想を規定してゐるのは、著しき存在の飢ゑと渴とである。我々は存在によつて存在し、現實に存在する限り存在によつて養はれてゐる。こゝに所謂の存在とは、勿論、現實的に存在する、形相によつて規定された如是存在から區別された存在そのものである。かゝる絕對的存在は認識することと生きることとである。生きるものにとつては生きることが存在であるから。かの周知のアリストテレスの公式は主意主義的に考へられてゐる。エックハルトに於けるかゝる主意主義的なものは看過されてはならない。それ故、ある被造物を愛するとは、無を愛することである。被造物に於ける神、存在に於ける存在によつてのみ、被造物は愛されるべきであるから。神の創造とは、それ自らの中に、卽ち「子」の中に諸觀念を創造したことである。神はそれ自らの中に創造する外はない。一神は存在であり、子は神の存在の思惟であるから。自らの外に創造するとすれば、存在の外に、卽ち無に創造することとなるだらう。こゝに於ても、存在の觀念とプラトン的イデアとの結つきがあらはれてゐる。たゞイデアによつてのみ、諸物は在存を得る、といふのである。それと關聯して、神は總てを、神と本質を一にする子に於て、卽ち知性に於て創造した。從つて神の創造は自由であり、自然に存する必然性からではないこととなる。それ故、創造主と被造物程似てゐ、且つ似てゐないものはない。といつてもそれは汎神論に陷るものではない。最後に前述のことと關係のある主張を要約して置かう。(一)神は永遠の今に於て、しかも全宇宙を同時に創造する。(二)神は元始から創造してその創造以前は存在しない。(三)神が語るとは行ふことである。(四)被造物は永續的につくられる、創造は絕えずなされるから。(五)「子」は永遠に生み出される。「子」の中に諸觀念の豐富が存する。が「子」は決して創造されない。

(三)神の認識と恩寵論

神は存在であり、しかも精神的生としての存在である。神に於ては、存在と本質は一致し、偶有性は實體である。神は如何なる被造物に於ても全體である。しかし、宗教的力點が神の彼岸性に置かれる。神はたゞ否定的規定によつてのみ、我々の言葉に移される。善といふも當らず、一者といふも、數に屬しない一である。しかし、かゝる新プラトン派的思想を超脫せんとする努力は隨所

に認められる。永遠に豐かなる神は自らを分ち與ふ。彼はたゞ存在のみを愛し、思惟し、知る。アリストテレスもいつたやうに、はたらくものは自己を自己に於て、自己に似たる結果に於て愛する。存在する總ては神によつて愛され、存在しない總ては神によつて憎まれる。といつても、エックハルトは神を總ての情念の彼方に置く用心を忘れてはゐない。神は彼自らのみを總てのものに於て愛するのである。神が憎むといつても、個人をではなく不正なるものの背後にある不正をである。

次に神の認識の問題に移らう。その第一の原則は等しきものが等しきものを認識するといふことである。それ故、神の認識の前提は、人間が神に移り變ることである。そしてこの移り變りは神が靈に生れることによつて成し遂げられる。しかるとき「子」は靈に現れ來る。それは、鏡による神祕性に於ける認識である。次に第二の認識の原則として、神はその諸結果に於て認識されるといふことがある。それ故、淨化された照明されたたましひの認識も亦、たゞ神の諸結果のみの認識である。かゝる思辨による神の認識は、超越と否定と因果性の道を經て得られる。この認識から區別されるさきの鏡による光に於ける認識は、豫言者的であり恩寵によるもの、脫我的であり、神の光の特殊の作用を豫想するものである。エックハルトは、認識の異れる種類、しかも直觀による全體の認識をも知つてゐたのであらう。この點エックハルトは一般的には先蹤に從つてゐるが、彼獨特の主張は次の點にある。淨福は認識や愛や觀照にではなく、「神から、神に、神の中に」卽ち神となることにあるのである。注目すべきことには、淨福は本來的にいつて、信仰や體驗や思惟や觀照ではなくして、神が完全に靈そのものの中に現存することである。

次に恩寵論に移らう。恩寵は無償で與へられたもの。この全くカトリク的な說と並んで、總てはたらくものは豫め形相を受容しなければならないといふアリストテレス的思想がある。神的存在を受けるもののみが信仰を有し、善の形相を受けた正しき人のみが善をなし得るといふのである。だが、恩寵は自然を破壞するものではなく、それを完成する。このことと必然的に關聯して、自由意志と人間の善性の說がある。靈は生來一者である善に向ふ。生來、第一原因を愛する。では、恩寵のありかは何處であるか。それは、アウグスティヌスやプラトンのいふやうに神的知性に與る、靈又は知性の本質である。神の像なる知性に恩寵がはたらいて、靈に、善をなすことを得しめる本質を與へる。しかも、恩寵が靈にはたらきかけるのは、靈が自らに歸るときにのみである。次第に被造物から離れ行くことこそ恩寵が靈に現在するしるしである。それは、靈の死を意味し、新しき心情と內的人間の生起である。かゝるカトリク的なるものと並んで、他の傾向が見られる。卽ち恩寵ではなく、聖靈が靈に入り、そこにハビトゥスを作るのではなく、直接的に靈の根底に子を生かすといふのである。恩寵は基督が永遠に人の中に生れることによつて、人が更生する神の永遠なる意志である。かゝる新プラトン派的動向は尙ほ二つの方向にたどることが出來る。(一)恩寵は、靈と神との合一を起す補助手段で

ある。靈は直接に神と對し、自らについては何物も知らず、自らが神であると想ふ。それは靈の陶醉であり直覺的把捉ともいへよう。しかし、注意すべきことには、エックハルトには、靈に於ける神の自己認識の考へが見られる。「子」が靈に生れるときには、神は神を認識し、神は自ら靈にはたらく。私が神を見る眼と神が私を見る眼とは一である。一つの直觀　一つの認識、一つの愛である。神と靈は、神が自らを直觀し、靈がその原像を見出す子に於て、出會ふ。換言すれば、神的知性は人間の知性が純粋である限り、その中に自らを實現する。神は能動知性に於て、自らに歸る。この意味に於て、能動知性は「子」に接近する。が、子ではなくして、子が生れ、そのことによつて一者が自己に還歸する純粋作爲である。こゝにも亦見られる新プラトン派的思想に於て、總ての動かされるものは又動くものである、しかも下方に或は前方にのみではなく、上方にも後方にも動くといふ考へが認められる。

(二)神は靈にそもそもの元始から神的なる光を、その中に神自らがはたらかんがために彼自らの似姿を與へたのである。純粋知性卽ち能動知性は或る神の姿を有する。神はたゞの存在ではなくして認識でもあるから。この靈の根底は純粋認識であり、その限り神的なるものである。それ故、靈の火花は創造以來神に似た、神のはたらきかけを受けて上方にはたらきかへす機關である。神は、眞理として知性に、善として意欲に、神と存在として、靈の本質に入り來る。靈の能力ではなしに、靈の本質が神と結合してゐる。若し靈がこの一つの力からのみ成立つならば、純粋精神、神ではあらうが、又まさしくその故に人間の靈ではないだらう。その本來の諸能力を具有する靈は時間に制約され、從つて被造物である。靈の諸能力は被造であつて、たゞ絕對的なる能動知性のみが被造でないのである。我々は神に變ることはない。聖者も基督にはならない。我々は神の肢體であり、神の像ではなくして、像に模して造られたものである。こゝにも、人間の認識を神的認識の模像とする考へが見られる。それに從へば、能動的知性は子と一であるとも考へられるであらう。又エックハルトは正義或は知性の統一を主張してゐる。がこゝにもアナロギアの概念が入り來る。正しきものの正義に對する關係はアナロギアである。アナロギアは觀念と現實の、形而上學と心理學の間の橋である。そこにはラテン・アエロエス派の影響が認められるが、エックハルトは自ら語つてゐるやうに、自己の概念と名辭を發見し、又下降と上昇のシエーマーに從つて考へてゐる。靈は、諸能力を有する具體的なるものとしては被造である。が、神が「子」として住み、生み、生さ、上昇を、自己への還歸を成就する神的本質をも有する。多に分散せる、靈の諸力の克服と、本質的なる一者への集中は子の靈に於ける出生の前提である。人間の行爲は、そのものとしては決して神的ではないが、その方向と基礎は神的である。

(四)更生、基督、倫理

最後に、エックハルトの敬虔說について述べよう。第一には、彼の基督論である。神の出生の永遠なる過程は、永遠に人間の靈の更生に於て實現する。「子」の出生と、更生とは如何なる關係に

あるか。更生は「子」の出生にアナロギア的に起るが「子」の出生は更生に於て起るのである。エックハルトの確信によれば、靈に於ける神の出生は神の人となりしことよりも重要である。神のなす總ては、神が靈の中に生れ、靈が神の中に生れることを原因としてゐる。では、絶對的永遠的なるものは、如何にして具體的有限的になるかとこゝに於ても問はれる。それは、靈に於て起るのである。靈は、有限者と無限者との、時間と永遠との間の橋である。このことは神的なるものも、我々には たゞ靈に於てのみ現實的になることを意味する。しかし、それは心理學的にではなく、形而上學的に解さるべきである。彼は、具體的なる人間或は具體的なる靈をではなしに、人間そのもの或は靈そのものを考へてゐるのだから。エックハルトの靈は新プラトン派的に、流出せるアイオーン的なるものと解すべきである。だが、この原靈は私の靈の中にある。そして私の靈の中に「子」が生れるとき、それは神的なるものの下降の限界であり、それ自らへの復歸のはじめである。かくして、宗教的なるものは、內的なるものに、我々が靈と呼ぶものに移される。とはいへ、我々の存在は、神に於ける形而上學的運動に依存し、神に於て起るものは、我々がそれを知ることなしに、我々に於て起るものの原因である。こゝに、基督教に於ける特に獨逸的なる特性があるのではなからうか。それは一般的にいつて、教義の內面化、主觀化である。或は、背後にプラトン的思想が存するのだらうか。例之、神についての思惟は神そのものであるといふ如き。第二に、何故に基督は要求されるか。罪からではなく、神と存在、觀念と現實存在、永遠性と時間の問題からである。絶對化の中に消えんとする神の少くとも模像を有せんがためである。基督は神の像であり、我々には原像である。かくして神と被造物とは關係づけられる。彼は、我々の永遠性のために、それにもまして神の超越性のために要求されるのである。第三に、エックハルトの強調するのは基督の礫刑ではなくして、彼の出生である。しかも、人となりし歷史的事實よりは、靈に於ける出生である。その限り、基督はエックハルトの思辨に對する前提である。第四に、基督が人となりしは、我々が神にならんがためである。苦まんがためである。神は我々の許にあつて苦む。我々と共に苦み、かくして我々が苦に打克つことを助けるのであるから。それは、又我々が眞に贖罪し得んがためである。基督のまねびこそ眞の贖罪であるから。「人であれ」とは基督が裝つて聖化した人間性であれといふことを。「子であれ」とは基督の像に從へといふことを、隣人を愛せよとは、汝のものを捨て、汝が總ての人と共有する人間性を愛せよといふことである。

我々の問題は自ら倫理に移り行く。(一)謙虛のあるところにのみ、「子」は靈の中に生れる。又この出生のために神は總てを創造したのであり、「子」の出生は人間をアナロギア的に神的ならしめるのである。神を見んと欲するものは、聖パウロの如く盲目でなければならない。自らの中を見なかつたとき、彼は神を見たのである。プロテスタント神學、特にその亞流はエックハルトに「隱れたる我慾」を見ようとするが、それはもとより根據のないことであ

る。彼に於ては、敬虔の目標は我々の淨福ではなく、神の榮光である。報酬のためにではなく、たゞ神の榮光のためにはたらくものが敬虔である。救濟にはたゞ神のみがはたらくと説かれてゐることに注目すべきである。かくしてこそ神の榮光は保たれるのであるから。後にルター及びカルヴィンに於て見出された神の榮光の説はエックハルトに於て獨特な形で現れてゐる。しかし、こゝに神祕思想の大なる論理的自己矛盾が存するのではなからうか――死すべき靈と神の現れ來る靈の根底と。敬虔なる思惟の二つの動機が融和されずにゐることは疑を容れない。が、現實は論理的ではない。否、かゝる矛盾にこそ現實がその眞の姿で現れるのではなからうか。(二)エックハルトの宗教は、神との意志協和に歸する。神と一つの意志を有することが生であり、淨福である。敬虔なるものの最高の課題は、總てを神に委せることである。正しき敬虔とは、神を新に見出さんがために、自己をも捨てることである。人は神と合一し、神と同じことをそれが何であらうとも、意志すべきである。敬虔なるものは、神の意志でありさへすれば、喜んで地獄に燃やされる。敬虔なるものにはたゞ一つの目標、即ち神の意志の實現と神の榮光への奉仕のみがある。そして兩者は淨福をも越えるものである。勿論、神の意志によるのであれば、地獄も地獄ではなくなるのであるが。(三)かゝる神の意志の内容は如何。それは我々に自己棄却と苦を要求するといふ外は、明確に規定されてはゐない。我々は多者の中に住む、神は一者である。多者を捨てて一者の中に一者を再び見出さなければならない。神への道は苦の道である、が苦だけではない。總ての苦は愛に於て起り、愛に於て終るのであるから。では、何故に、神は彼の友を苦しめるか。神は功績を求めず、自らの業績を欲せず、貧しき中に獨り支配せんことを欲するのだから。(四)罪が大である程、悔いも大である。神は大なる罪をも赦す。罪から起き上れる人に、その過去を問はず、罪の罰を與へない。罪人の宣義はしかし、かゝる思想の中には求められない。業が善ならしめるのではなく、善なる者が善く行動するのである。存在が聖であつて業が聖であるのではないから。しかし、かゝる思想は、實踐的、活動的プラトン主義から解さるべきである。自きものが自存在によつて自くあるが如く、善なるものは善によつて善であり、敬虔なるものは、敬虔性によつて、基督によつて敬虔である。敬虔なるものとは、神を怖れるものではなく、彼か愛し何ものよりも正義を喜び、その行爲が神の榮光である人である。敬虔なるものの生命感情として喜悅と愛とが強調される。正義によつて義しくあり、正しく行動するといふことの歸結として義しくある總てのものは、神に於てあることとなる。神は我々を義しきものとしつゝ我々の罪を義とする。蓋しロゴスが現實を、人を規定し形成するのであるから。こゝに注意すべきことには、エックハルトは、神に於ける敬虔なるものの存在を神に於ける被造物の存在より高く評價してゐる。敬虔なるものは、神が存在であり、被造物が神に於て存在するよりも、一層高き意味に於て、神に於て存在するのである。神はこの特殊の存在の賦與者であり、敬虔なるものには神でない總ては

無であるから。(五)エックハルトの倫理は宗教である。總ての善は神性にその根底を有する。義なる者は信仰から生きる。我々の業は、聖靈のはたらきとして、恩寵の成果であり、永遠の生への努力として、花である。最後に、全體に光彩を添へる二三の點をあげよう。(イ)患へるものに一杯の肉汁を與へるものは、エクスタシスに生きる者よりも深き愛を有するのである。神を本質的に有する者は、何處に於ても彼を有する。敬虔なる生の業に、心術と勞作とが先立つ。(ロ)總ての地上的なるものは借物である――靈も身も。我々はそれを返却しなければならないやうに用ひなければならない。人間が生來有するのは、病患と惡意のみである。神的なるものは總て貸し與へられたものである。(ハ)同胞には當態的に對し、常規を逸してはならない。事態的、非個人的愛が說かれる。或る個人の愛に溺れてはならない。一人を他より愛する者は被造物を愛し、人に於ける神を、總てに於ける一者を愛しないことになるから。

以上が、神學者にして哲學者、基督者にして新プラトン派に屬するエックハルトの全貌である。服從と疑念、探究と確信、ことがらとことばとは分ち難く結合してゐる。明確な形態をなしてゐないことは彼を愛すべきものとも、疎しきものともしてゐる。が、彼の究極の關心事、それは又我々のものでもあるべきであるが、彼自らの語を以て最も明に表すことが出來る――「汝にとつて神が大なるものとなるやうに汝の全力を注げ」。(服部英次郎)